

学校と博物館の「連携」

2011.9.27 「平成 23 年度ミュージアム・エデュケーター研修」
美濃加茂市民ミュージアム 可児光生

1. さまざまな「連携」のかたち

[館種など]

- * 館の規模、対応する地域の違い
(国～都道府県～市町村、特定の対象か不特定か)
- * 受入人数の違い
(グループやクラス単位などの少人数か、学年などの多人数か)
- * 目的と教科の違い
(美術館 [鑑賞] と博物館 [知識習得] か)

[取り組み方]

- * 授業と指導案
(年間計画に基づく「授業」として行われるのか、校外学習としての見学活動か)
- * 教員の関わり、役割
(博物館にほとんどお任せか、教員が主体的か)

いろいろなパターンで活動が行われている。

[[「連携」と「利用」]]

- ・どのような形でも「連携」という言葉を安易に使っている。広義、狭義で使い分けて考える必要があるのではないだろうか？
- ・両者にそれなりの主体性があるのはじめて「連携」という言葉を使うべきで、むしろ「利用」や「活用」という言葉の方が適切な場合もある。
- ・各館や学校でそれぞれの考えや形があり、それを尊重すべきであって一定のスタイルを押し付けるものではない。
- ・学校の考えや事情、段階に応じたより良い「利用」状態であればいい。
- ・両者のゆるやかな協力関係、信頼関係がまず第一である。

[参考]

「小学校学習指導要領(平成 20 年版)」 * _____ は新規の表現
社会「博物館や郷土資料館の施設の活用を図るとともに・・・」
理科「博物館や科学学習センターなどと連携、協力を図りながら、それらを積極的に活用
するよう・・・」
図画工作「地域の美術館などを利用したり、連携を図ったりすること。」
総合「博物館等の社会教育施設との連携・・・」

2. 「連携」によって、子どもたちに対してもたらされていること

(H22 版『みのかも文化の森活用実践集』(「改善シート」 p43~p50、「小学 6 年生アンケート」 p51~p61)) の分析から

◇学校側からの視点

《理解、関心の深まり》《教材が身近に》

- 「体験により理解も深まり、昔の暮らしに対しての興味が増していく様子」(4 年社会、p46)
- 「教科書に載っている物と同じような古代の遺跡がたくさんある」(6 年社会、p47)
- 「身近なところに化石がある」(6 年理科、p47)
- 「遠くの感じていた日本の文化が身近に感じられるように」(6 年総合、p47)
- 「教科書に出てくる「土間」「ふすま」の言葉の意味をよく理解」(1 年国語、p43)
- 「[水のはたらき] がきっかけで理科がすきになった」(p56)

↓

[これらを更に深めていくためには]

- 学校としては、事前事後の学習、博物館での授業の位置づけをしっかりとる。
- 博物館としては、資料や作品を教材として使いやすいように工夫をする。

◇博物館側からの視点

- ・学校側の観点からさらに、意識して関わっていく視点とは。
- ・博物館としてさらに増やしていきたいシーンとは。

《驚き》

- 「化石林について知ることができ、驚きもあってよかった」(6 年理科 p47、プログラム p28)
- 「遺跡がたくさんあることを知り、驚くとともに、…」(6 年社会、p47、プログラム p24)
- 「現地に行き、その場で話を聞くことで、感動を伴った学習となった」(同上)
- 「たぬきのかげや、糸車のかげが見えてすごかったです」(p52)

《知的好奇心》《モノを観察する力》

- 「化石にさわって、「うわ、昔の物にさわってる」という気持ちになって…」(p54)
- 「いつもふつうに見ている川などでも、(土砂が) 積もっているなどと発見できるようになった」(p56)

《多面的に、総合的に、発展的に考える力》

- 「(室町文化体験を学んで) 日本人は四季を大切にすることもわかったし…」(p52)
- 「(室町文化を学んで) 心で伝える感謝の気持ちなどを昔のひが大切にしていたことがわかった…」(p55)
- 「洗濯板は、今の洗濯機よりより(簡単に) きれいになったし、エコだからすごいと思いました」(p53)

《結論や結果だけでなくプロセスを大事にする》

- 「…昔の暮らしの授業で、炭火アイロン、洗濯板を使っでの洗濯などを体験させてもらった。…参観して意外だったのは、炭火をおこすなど手間のかかる作業の過程に子どもたちが目を生き生きとさせていたことだ。…ああ、そうなのか。子どもにはこの過程こそが必要なんだ。大人はすぐ結果を得ようとし、子どももまた、それに慣れてしまっている。何事にも過程があることを忘れてしまっているのだ、と気づかされた。…」(保護者の声・2006 年 10 月、朝日新聞)

- *博物館スタッフだけでなく多様な価値観をもつボランティアが関わることにより、発展的、多面的にものが見えることがある。複数のさまざまな人々が関わることの大事さ。

3. 「丸投げ」と「ひとりよがり」の改善のために

「連携」のひとつのあり方に学校からの「丸投げ」の形があるのは事実である。博物館は学校からの要望を一方向的に受け、その対応に戸惑うこともある。

また逆に、博物館やそのスタッフの「一人よがり」の応対や進め方に対して、学校の理解が得られないこともある。

そのような状況（どちらかの一方的受身状況）を解決すること、そして学校・博物館両者の思いや視点のギャップ（学校として身に付けさせたい知識・博物館として子どもに伝えたいこと）を少しでも埋めていく手立ては？

◇ 「face to face」

- ・両者それぞれの視点やねらい、考えていることは、相手を否定するものではない。+αの考えで、ていねいで、いい利用ができるようにすること。
- ・できるだけ直接会話し、意識の共有、互いの共通理解の努力をすること。
- ・普段からの綿密なコミュニケーション、双方向対話、「face to face」

→お互いの信頼関係が築かれる

*学校側の依頼があった時、学校教育の概念から離れ、館が独自にプログラムを作成し実施していくことは可能。一つのスタイルであろう。しかしそれは、館としての理念やスタイル、役割を学校が十分に理解しているという、信頼関係があつてのこと。

◇率直な意見交換

(H22版『みのかも文化の森活用実践集』(「改善シート」から)

- ・「…(地域の歴史)学習は、年貢の計算や語句が難しく、児童には理解が難しかった」(p45)
- ・「説明の「(博物館との)打ち合わせ時間をもう少し早くもち、準備をしていく中で疑問に思ったことを更につきつめていけるとよかったと思う。」(p49)
- ・「大地のつくりと変化」の授業 (p28)
 - 「化石のレプリカ」づくり…化石への興味づけ、しかし図工的要素、「お持ち帰り」要素
 - ↓ (両者の話し合い、打ち合わせ)
 - 「岩石標本」観察へ改善、驚きの時間が大切

◇連携や研究の組織(的なもの)を通しての検証

- ・あまり形式的にならず、ゆるやかで自由な意見交流ができる場を設ける。
 - 「連携委員会」
 - 「授業研究会」
 - 「協力校・パートナーズ・プログラム」
 - 「活用委員会」(美濃加茂市民ミュージアム)

◇フラットな関係

- ・博物館に対しての「敷居が高い」「使いづらい」と感じている学校も多い。
- ・学校に対して「もっと博物館のことを知ってほしい」のならば、博物館も学校や子どもたちの実態や現状をもっと知ろうとすべき。
- ・両者が上からでも下からでもなく、同じ高さの「フラットな視線」で話し合うことが大切。
- ・その上で、学校と博物館それぞれが何をすべきかという、役割分担の明確化が図ることが必要。

* 「サービス」…学校の要望に対して全面的に提供していく。

↓

* 「連携」…学校側の要望に対して博物館としての視点やこだわりを加味し提案をしていく。

4. 「連携」の成果と評価

*具体的な数値の表れはなくても、何か「手ごたえ」「反応」がほしい。

- ・子どもの反応をみる。→次へのヒントにもなる。
(授業中や授業後の何気ない子どもたちの「つぶやき」を大事に拾う。)
(授業後の反省会(ボランティアを含む)を通し共有化する)
- ・子どもの行動の変化を見る。
(『実践集』事後のアンケート p56)
[学習のことを家族に話す] → [改めて来館する] → [他館へも行く]
- ・子どもの学び方の発展を見る。
(夏休みの子どもの研究での取り組みを検証)
「活動を通して、夏休みの研究テーマにする児童がいた」(5年社会、p46)
(個人のテーマとして捉えなおすこと、来館したり学芸員に聞いたりすること)
- ・学校側に対しての「自由な」学びの投げかけや問いかけに対しての変化を見る。
(学習プログラムでの変化や改善)
(子どもの「お礼の手紙」の自由さが出てきたか)
↓
 - ・子どもの時に確実に誰もが持っていた知的好奇心をずっと持ち続けてもらうこと。
 - ・「子ども」「学校」「博物館」の三者に成長があること。

5. 「連携」に際して求められるもの

(1) 博物館として

- ◇館としてのそれぞれの「理念」「方針」を館内のみなで共通認識すること
- ◇改めて「学校にはできないが博物館ではできることは何か」を考えること
- ◇あまり形式ばらないこと、「できるところ」からやってみること
- ◇すべての前提である「自由な空気」を忘れないこと

(2) 博物館スタッフとして

- ◇「忍耐力」(あえて一つ)
 - ・(周囲[社会、組織、上司・・・]の理解不足に対する忍耐力)
 - ・学校に理解をしてもらうために粘り強く対応していく忍耐力
 - ・子どもの「発見」を辛抱強く待つ「忍耐力」

【関連資料】

- *西尾円「学校の博物館利用における学習活動の評価」(『博物館学雑誌』33-2、2008.3)
- *西尾円・藤村俊「夏休みの科学作品・社会科作品における博物館の利用について」(『美濃加茂市民ミュージアム紀要』第7集、2008.3)
- *可児光生「美濃加茂市民ミュージアムの博学連携活動」(『瑞浪市化石博物館研究報告』33、2009.2)
- *西尾円「みのかも文化の森における学校活用の内容の変化について」(『美濃加茂市民ミュージアム紀要』第9集、2010.3)
- *長谷川明子「中学生の学校活用～市民を育てる博物館への入り口～」(『博物館研究』509、2010.11)
- *可児光生「活用の実践例小学校編Ⅰ・美濃加茂市民ミュージアム」(東洋館出版社『理科の教育』2011.8月号)